ドイツ帝国時代のベルリンの建築物

田中 辰明
お茶の水女子大学名誉教授・工博

はじめに

筆者の知人、上由美子さんの祖父が昭和の初期に欧州に業務出張した。そしてベルリンで当時の絵葉書を購入し帰国した。その絵葉書はそのまま保存され、上由美子さんにより保管されていた。第二次世界大戦末期にベルリンは連合国により、徹底的に破壊された。従って、この絵葉書に見る当時の建物やその位置が現在のものと異なるものが多い。上由美子さんの祖父が絵葉書を購入した時期は不明であるが、昭和元年(1926年)と想像される。その時期、ドイツはヴァイマール共和国時代(1919～1933年)であった。しかし絵葉書の建築物は全てドイツ帝国時代の建築物である。これら建築物について解説してみよう。

この絵葉書には１枚のイラスト(図１)が添付されていた。若者がトランクを下げているイラストで、これには「無事にベルリンに到着した！」という文字が入っている。ベルリンはプロイセン、ドイツ帝国の首都として発展を続けてきた。鉄鋼、化学工業を中心に工業化が進み、地方から沢山の労働者が職を求めてベルリンに出てきたのであった。初代ドイツ帝国皇帝となったヴィルヘルムⅠ世治世の時代である。

図１　うまくベルリンに到着した!

１．ドイツ帝国議会建物

ドイツ帝国議会建物を図２～図６に示す。この建物の建築設計者はPaul Wallotで、1884～94年に建設された。第二次世界大戦では連合国側の攻撃対象となり、大きな損傷を受けた。この建物は東西ドイツに分かれていた時代は西側のTiergarten地区に建っていた。西ドイツ(ドイツ連邦共和国)の首都はボンであったので、この建物は議会としては使用されず、ドイツの歴史を展示する博物館になっていた。1990年にベルリンの壁が崩壊し、東西ドイツが合併、統一されると大修理が行われ、1999年以降この建物を再度ドイツ連邦共和国議事堂として使用することが検討された。しかし、この建物は1933年にヒトラーが政権を取った直後に出火する事件があった。ヒトラーはこれを共産党による放火と決めつけ共産党議員の逮捕が行われ、ナチの飛躍に結び付けた。この建物はヒトラーも政治を行った建物であり、ドイツは再度議事堂として使用するにはかなりの気を遣っている。1995年から1999年にかけての大修理には旧敵国であった英国の建築家Norman Fosterに設計を委ねている。図２はドイツ帝国議会とビスマルク像である。ビスマルク(Otto Eduard Leopold von Bismarck Schönhausen, 1815-1898)はプロイセン王国首相(在職1862～1890年)、北ドイツ連邦首相(在職1867～1871年)、ドイツ帝国宰相(1871～1890年)を務めた。ドイツ統一を果たした中心人物であり、卓越した外交力を持ち鐵血宰相(独：Eiserne Kanzler)とも呼ばれた。ドイツを強大国に引き上げた人物であった。ビスマルク像は帝国議会建物の前に立っていたが、ヒトラー政権下の1838～1839年にかけてティアガルテン(Tiergarten)地区のグローサーシュテルン(Großer Stern)に移動された。ビスマルク像の下にあった６つの像は1958年以降行方不明である。図３は帝国議会建物の正門である。図４はドイツ帝国議会建物の正面正門である。図５は現在の帝国議会建物である。ドイツ帝国初代皇帝となった